第４学年国語科の実践

１、単元名　　心の動きを読み取ろう
　　「ごんぎつね」（新美　南吉　作）

２、単元目標

〇叙述から想像を膨らませて読み、読み取ったことを進んで話し合おうとする。（関心）

〇場面の移り変わりや情景、登場人物の心情を叙述をもとに想像しながら読んでいる。（読むこと）

〇課題について自分の考えをまとめ、一人ひとりの感じ方に違いがあることに気づき、考えを深めようとする。（読むこと）

３、ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

（１）教材について

本単元の内容は学習指導要領「C読むこと」の②内容（１）のウ「場面の移り変わりや情景を、叙述をもとに想像しながら読むこと」、エ「読み取った内容について自分の考えをまとめ、一人ひとりの感じ方に違いがあることに気づくこと」、カ「書かれている内容の中心や場面の様子がよくわかるように声に出して読むこと」にあたる。

この物語は、ひとりぼっちのこぎつね「ごん」と兵十との心のすれ違いが、美しい情景描写を背景に書かれた作品であり、子ども達の感受性に強く訴え、深く心に食い入る作品である。ひとりぼっちで穴に暮らすきつねの「ごん」。村人にはやっかいなきつねだと思われているほどいたずらが過ぎるごんであったが、ある日、ほんのちょっとの軽い気持ちでした兵十へのいたずらや兵十の母の死などから、自分のしたことについて立ち止まって考え、兵十へのつぐないを始める。自分と同じ「ひとりぼっち」という孤独の身になった兵十へ毎日届け物をしていくうちに、親しみの気持ちが高まっていくばかりなのに兵十には一向に伝わらない切なさ。相手のことを思うほどに伝わらないもどかしさ。そして、互いの気持ちが交わることなく迎える第６場面で、最後にごんが兵十に打たれた時の衝撃は子ども達にとって大きいはずである。心のすれ違いから撃たれることになってしまったごんだが、このような最後に至るまでにあった数々のごんの心情の変化に目を向けていくと、ごんの兵十に対する気持ちの高まりを感じながら読み進めることができる。

この物語には、ごんの心情や行動が変化する転換点が大きく５つあると考える。１つ目は兵十の母が亡くなったことからうなぎ事件を振り返って行動を反省する点。２つ目は麦をとぐ兵十を見かけ「兵十も自分と同じひとりぼっちか」と自分と兵十を重ねあわせる点。３つ目はいわし屋から盗んだいわしを兵十の家に投げ込み、つぐないをした気になったが、結果的には兵十がいわし屋に殴られてしまい、かわいそうだと兵十を思いやる点。４つ目は加助と兵十の会話を聞いて、自分の行いが神様の仕業だと勘違いされ、自分のしたことと兵十の思いが通じ合ってないことがわかっておもしろくない点。５つ目は最後に兵十に撃たれた時、兵十に「ごん、おまいだったのか。いつも、くりをくれたのは」と尋ねられ、うなずく点である。これら５つはどれもごんの心情が変化し、兵十に対しての思いが高まっていく点ではあるが、中でも最終場面にある５つ目の転換点が重要であると考えている。なぜなら、１～４で少しずつ高まった思いがついに兵十に届き、兵十の気持ちが重なることで変化するごんの心情、つまり、はじめてわかりあえた瞬間だからである。ごんの気持ちを想像しながらも、出来事や叙述に根拠を求めて客観的に心情を読み取る力をつけるには、適した教材ではないだろうか。

（２）指導について

①ごんの心情の転換点に注目させる

４年ですでに学習した２つの物語では、中心人物の人柄や心情を読み取るという課題を設定した。前後の関係や叙述などから心情がわかる文にサイドラインを引き、想像して気持ちを書き込んでいくというものであった。しかし、このごんぎつねという教材は、中心人物であるごんの性格や出来事をとらえるだけでは、子ども達に最も読み取ってほしいと考えるごんの兵十に対する思いの高まりと通じない切なさを読み取ることは難しい。そこで、思いの高まりや切なさ、やっと通じ合った時のごんの心情に注目させるために、心情の転換点について子ども達に意識させたいと考える。

「教材について」でも述べたが、この物語において転換点は大きく分けて５つあり、最も大きな転換点とされるクライマックスにあたるのが撃たれたごんがうなずく場面である。子ども達には全文通読の中から、ごんの心情が転換したところがいくつあり、またそれはどこなのかについて、物語中から１文で探し出させる。わずかな変化も加えれば転換点は山ほど見つかるが、ペア交流やグループ交流を通して厳選し、全体の場で最もごんの心情が変化したところについて自らの意見を持つとなると、一人ひとりの考えの相違が必ず見られるはずだ。その相違をもとに理由付けをしながら話し合い、友達の意見に耳を傾けて学び合う姿を期待したい。

②最も心情が変化した箇所　＝　クライマックスについて

今回、ごんの心情が最も変化した場所を探す際に、投げかけとして「このお話のクライマックスは？」という表現を使う。今までクライマックスとは何かという指導を受けていない本学級の子どもたちは、「クライマックス」という言葉を初めて耳にす

るであろう。そこで、クライマックスの定義を「中心人物（この場合はごん）の気持ちが一番変化するところ」とし、様々な点が挙げられる中から自分の意見に理由付けをして全体交流を行いたい。

なぜ、クライマックスに注目させたいかというと、この物語から読み取ってほしいと思うごんの心情（寂しさ、切なさ、悔しさ、もどかしさ、やさしさ、うれしさ　等）の中でも、「通じあえた・わかりあえた」というプラスの気持ちを感じてほしかったからである。初発の感想では、学級の半分が「ごんは最後に撃たれてかわいそう」「いたずらなんてしなければ撃たれることはなかった」という意見だった。初めはこのような感想を持った子ども達にも、「かわいそうだった」だけで終わらずに、「ごんはきっと～だったのではないか？」とごんの気持ちを想像しながら考えを持ってほしい。

（3）ひびき合いについて

児童の実態の項でも述べたが、授業内の発言において発表する人が限られている現状がある。そのため、自分の考えを他者と交流させることなく１時間が終わってしまう子も多いので、全体交流の前に小集団（ペア交流、その後グループ交流）での交流の場を作る。そして、１時間のうちに全員が、自分の考えを伝えて相手に受け止めてもらうことができるようにしたい。

また、交流の際には理由付けを大切にする。同じ文章を根拠にしていても人によって捉え方に違いが生まれてくるからである。自分の考えとの共通点や相違点を見つけながら聞けるとよい。発言の仕方についても、「〇〇さんにつけたし」「〇〇さんと少し似ていて」「〇〇さんと違って」「わたしは〇〇だと思います。理由は・・・」など自分の立場が明確になる発言の仕方も定着させていく。

ペア交流やグループ交流を通して、一人ひとりが自分の意見を持ち、理由をつけて話し合いを行う。同じ１文に注目したとしても理由が違えばそれはまた新しい考え方に変わる。同じような点に注目したとしても、友達の意見に耳を傾け、読み取り方や想像の仕方にはそれぞれ違いがあり、多様な考えが出てくることに気づく姿を、本授業のひびき合いの姿としたい。

４、単元指導計画

次	時	ねらいと学習活動	評価規準と評価方法
一	1 2 3	〇教材に興味を持ち、学習の見通しをもつことができる ・全文通読。音読練習。感想交流。 ・登場人物、場面などをおさえる。 ・新出漢字や語句の確認	関：話に興味を持ち、感想を持っている（発言、感想） 読：登場人物、あらすじ、場面設定、誰の会話なのかなど、関係性がとらえられる。 （ノート、発言、観察）
二	4 5 6 7 8 9 10	〇場面の状況や登場人物の様子や心情など叙述を手がかりに読み取る。 ごんの気持ちの移り変わりを読み取る ・「ごんの気持ちが変わったのは何ヶ所あって、どこなのか」 ・「ごんはどんなきつねなのか」 ・「ごんの気持ちが変化した一文を出し合い、グループ、全体で検討する」 ・「ごんの心情の一番大きな変化（クライマックス）はどこか」＜本時＞ ・ごんの心情の移り変わりをまとめる	関：読み取った内容を進んで伝えようとしている（発言、観察） 聞・話：自分の考えをわかりやすく表現している。友だちの考えを自分の考えと比較しながら聞いている（発言、観察） 読：課題について登場人物の言動、状況を視点にし、語句や文章を根拠に想像を膨らませながら読んでいる。（発言・観察・ノート）
三	11	〇新美南吉の書いた他の作品にも親しむ	関：同一作者の他の作品に興味を持ち。すすんで読もうとしている（観察）
四	12 13	〇「てぶくろ買いに」と「ごんぎつね」（どちらも新美南吉の２つの作品）を比較して読み、心情の変化や様子を読み取る。	読：２つの作品を比較し、心情の移り変わりに注目して読む（ノート、発言）

５、本時について

（1）目標

〇ごんの心情がより大きく動いた点を叙述に即して話し合うことを通して、ごんの心情を読み取ることができる（読）

（2）展開（９／１３）

学習活動	指導上の留意点
１、前時までの学習内容を想起する ２、学習課題について確認する	・できるだけ客観的にならないよう、ごんの心情に寄り添うように読むようにさせる。

ごんの気持ちが１番大きく変わったのはどこだろう	・自分の意見の見直し、ペア交流、全体交流という流れで話し合いを始める。
３、課題に対する自分の考えを確認し、考えを交流する。 予想される子ども達の意見 **①「ははん、死んだのは兵十のおっかあだ」** 「あ、兵十だ。いたずらしちゃえ。」→「赤いさつまいもみたいな元気な顔がしおれているから心配。自分のせいで兵十のおっかあは死んだんだ」 **②「ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった」** 「おもしろそうだからいつもみたいにいたずらしちゃえ。ちょっとからかってやろう」→「なんてことをしたんだろう。きっとわしのせいだ」 **③「おれと同じひとりぼっちの兵十か」** 「おっかあはうなぎを食べたかっただろうに、わしがいたずらをしたばっかりに」→「おっかあが死んで兵十はひとり。わしと一緒。ひとりぼっちの気持ちはよくわかる」 **④ごんは、これはしまったと思いました** 「いわしをあげたから、さぞかしこの償いを喜んでくれただろうな。いいことした」→「いいと思ってしたのに、兵十を結果的に傷つけてしまったなんて、兵十すまない。」 **⑤「へえ、こいつはつまらないなあ」とごんは思いました** 「もしかして、物を置いてるのはわしじゃないかと気づいてくれるかもしれない。気持ちはきっと伝わっているはず」→「なんだよ兵十。わしだよ、ごんだよ。わしがやってるんだよ。もっとわしを見てくれよ」 **⑥「ごん、おまいだったのか、いつもくりをくれたのは」** **⑦「ぐったりと目をつぶったままうなずきました」** 「つぐないをわしがやってるなんて思わなかったし、兵十はわしのことに気づいてくれてなかった。」→「兵十、そうだよ。わしだよ。やっとわかってくれたんだね。」 ４、学習の振り返りをする	①②とつながる部分がある。兵十に対する思いもなく、いたずらをしていたごんだが、おっかあの死を目の当たりにして責任を感じる。この後つぐないへと向かうので、③の気持ちと似ている。　**→反省** ②いたずらをしたことへの後悔。償いが始まるきっかけになっているが、ごんは自分の責任だと自分で思っているだけ。③でも反省の気持ちが生まれることに気づかせたい　**→反省** ③反省の気持ちから兵十が気になりだしているごんは、自分も兵十も「ひとりぼっち」という共通点から、兵十に対する思いを強くする。①から兵十が気になりだしているごんの気持ちをおさえさせたい **→親しみ** ④償いがあだになったことに気づき、また自分の行動を振り返る。しかし、次の日もまた償いに行くことから気持ちの変化はない。償い自体は続いていることに気づかせたい　**→反省・後悔** ⑤償いが自分だとわかってくれてるのでは？という期待から後を付いていくごんの気持ちの高まりと、次の日もやはり償い続けることに気づかせたい **→わかってもらえない** ⑥⑦とほぼ同じ箇所だが、ごんの発言ではなく兵十の発言であることが⑦と異なる。ごんの心情の変化を探しているので、より⑦の方が合うことに目を向けさせたい。　**→わかってもらえてうれしい** ⑦今まで高まってきたごんの兵十への気持ちは一方通行で、重なりは見られなかったが、ここでやっと通じ合う。この文以前（特に④）から想像できる気持ちと比較すると変化がとらえやすいことに気づかせたい **→わかってもらえてうれしい** ＊叙述から想像を膨らませて読み、読み取ったことを進んで話し合おうとする。　（関心） ＊場面の移り変わりや情景、登場人物の心情を叙述をもとに想像しながら読んでいる。 （読むこと） ・友だちの意見にも耳を傾け、新しく気づいたことや感じたことについても交流させる。 ・挙手が少ない時は、ペアで交流する時間を設ける。 ・「教科書△ページの〇行目の文から、ごんは□□□と

	思っていたのではないかと思います。理由は～だからです」のように、ごんの気持ちになって発言ができるように指導する。

６、実践を終えて

〇子どもと単元を作ることについて（単元における子どもの思考の流れ）

次	時	学習活動
一	1	・全文通読。音読練習。感想交流。
	2	初発の感想から ・最後にうたれてかわいそうだけど、最後にいいきつねになった ・兵十のおっかあが死んでからごんは変わった。 ・兵十がひとりぼっちになったのを見て変わった ・ごんは最後、わかってもらえてうれしかったのでは？ ＊子ども達の中には、ごんが変わったととらえる感想が多かった。ごんの変化に目が向いているので、中心人物であるごんの心情の変化を読み取ることを課題とした。
	3	・新出漢字や語句の確認、意味調べなど。
二		〇場面の状況や登場人物の様子や心情など叙述を手がかりに読み取る。
	4	ごんの気持ちの移り変わりを読み取る
	5	・「ごんの気持ちが変わったのは何ヶ所あって、どこなのか」 ＊課題に入る前に「気持ちの変化なんていっぱいあるよ」といっていた子がいたので、変化していない箇所や少し変化した箇所なども含めて、たくさんあがることは予想した。多く見つける子と１つしか見つけられない子などの差はあったが、普段は課題がなかなか理解できず、自分の考えを持てない子も自分の考えを持つことができていた。
	6	・「ごんはどんなきつねなのか」 ＊ごんの気持ちを考えるために、ごんになって考えてみようとなげかけた。すると、騒がしく声をあげたり、はしゃいだりする子が数名いた。そこで「ごんってこんなきつね？」と問うと叙述に目を向け、「ひとりぼっち」「家族がいないからさみしい」「いたずらばかりするけど、かまって欲しいのでは」という考えがでてきた。これにより、変化を考えるベースとなるごんの人物像が認識されたと考える。
	7	・「ごんの気持ちが変化した一文を出し合い、グループ、全体で検討する」
	8	・「全体で交流された意見の中から、ごんの気持ちが１番大きく変わったのはどこかについて、自分の考えを持つ」 ＊当初、ごんの気持ちが１番変わった点として５カ所くらいが出てくると予想していたが、全体交流では１３カ所もあがってきた。→　気持ちの変化をとらえるための読みの時間不足や、叙述に証拠を求めて理由付けをする指導が不十分になっていたためだと考える。 ＊全体にあがってきた１３カ所について、減らすための話し合いの時間（これは違うというものをあげて話し合う）を設けようと思ったが、一人ひとりが自分の意見を持つことを重視して時間をとった。叙述に即した理由付けをして意見にこだわりを持てるようにした。
	9	＊13 カ所あげられた変化の箇所だが、子ども達の考えを確認していくと 7 カ所に絞られていることがわかった。傾向としてはいたずらを反省する気持ちから、つぐないを始めるという変化に注目している子が多い。 ・「ごんの気持ちが１番大きく変わったのはどこか」＜本時＞ ＊前時にあがった７ヵ所について理由を述べていった。「いいと思います」という声などもあがっていた

		が、一つ一つの意見について説明していくだけになってしまった。自分の意見に自信が持てず、発言に対しても消極的だった。子ども達にとっては、７つという選択肢は多い。また、見出しをつけるという形で意見をまとめていったが、話を聞いているだけだと理解が難しい様子もあった。 →　話し合いからだけではなく、心情の移り変わりを視覚的にも捉えられるようにする。心情曲線を取りながら、心情をまとめていく。
	10	・「ごんの気持ちの変化をまとめよう」 ＊話し合いをした７つの選択肢について、ごんの心情曲線上に点をとった。人によって上がり下がりの幅は違ったが、だいたいどの子も、兵十がごんの行いに気づき、ごんと兵十が分かり合えたところが最も高くなっていた。ごんの心情の高まりを感じることができたようだ。話し合いの際に多くの子から支持された「おっかあの死がきっかけとなって償いを始める」というところは、曲線で表すとごんの心情の触れ幅がさほど大きく表されないことから、「ここではない」と選択肢からはずされた。視覚的なもので捉えると、より理解に繋がるようであった。
三	11	・「新美南吉の書いた他の作品に親しむ」 ＊ごんぎつねを扱った後、同作者の「てぶくろ買いに」を読み聞かせ、親しみを深めた。ごんぎつねとの類似点や、相違点を探し、感想を持った。感想を書いた後、グループで交流した。

〇本時の課題について

本時の課題に対し、一人ひとり考えを持つことはできたが、全体で交流する場面においては、積極的な交流とはならなかった。この様子から、子ども達にとって本時の課題が、切実感を持って考えようとする課題ではなかったと感じる。その理由としては、実態に対して課題が適していなかったことが考えられる。

本時の「ごんの気持ちが一番大きく変わったのはどこか」という課題は、場面ごとに細かく読んでいくよりも物語全体を大きくとらえる必要があるが、丸ごと読む方法をこれまでに扱ってきてはいない。しかし、だんだんと、中心人物の心情を読み取ることが定着してきていたので、児童は今までの経験を活かして読み取っていけるのではないかと考えた。本文に根拠を求め、文章から想像できることを書くという流れは身についていたが、すぐに探せる子と時間を要する子は見られていた。本課題とうまくつながらなかったようである。読み取りの時間が充分でなかったことや、課題に対する選択肢が７つ出ているなど、ごちゃごちゃとした曖昧さが残ってしまったようにも感じる。７つの意見をそれぞれ比べ、より大きな変化を話し合うには時間を要し、持たせるはずの切実感が間延びして薄れてしまった。これらのことから、児童の実態や力と合致しない課題となってしまった気がした。

〇成果と課題

この実践を行っての成果としては、中心人物の心情を読み取るという課題から、本文中に根拠を求める姿勢は身についてきたように感じる。ごんの心情が一番大きく変化した箇所を見つけ、なぜそこを選んだかを考えるには理由付けが必要となる。必ず理由付けを行うことを徹底したため、変化を読み進めていくうちに陥りがちな単なる想像から、叙述に戻った読み取り方に慣れることができた。また、心情の変化をまとめるために、最後に心情曲線を書いたのは、子ども達の思考を整理する良い手立てとなったように思われる。言葉だけではなく、視覚で捉えるというのも効果的であった。今回はまとめとして心情曲線を取り上げたが、本文中から根拠を見つけ出す中で、理由付けの一つとして扱っても良かったかもしれない。

一方、課題としては、本時で扱う選択肢の数が多すぎてしまったことが挙げられる。計画当初は１３ヵ所に分かれていたが、グループでの話し合いを行っていったことで、７ヵ所まで減った。しかし、授業時間１時間だけで一番の変化を選ぶのは困難である。せめて３ヵ所くらいでないと、一つ一つを集中して吟味できないという印象を受けた。自分の考えを持った上で、さらにペア、グループ、全体の交流などを重ねていき、選択肢を簡潔にしていくと、より絞りやすく、はっきりしたのではないだろうか。それには、一時間ごとに児童の状況を把握し、深まりを持たせたいところでは時間をとったり、全員で確認しておきたいところでは交流を持たせたりするなど、臨機応変な計画の変更が重要だと感じた。

また、クライマックスを探して読んでいくという課題を、児童に浸透できなかったことも反省点である。これは、この課題に至るまでの間に、クライマックスを探して読むために必要なスキルを身につけさせることが不十分だったからだろう。本時で扱うまでに、簡潔で明快な物語文を用意して、物語文の構造やクライマックスを探す読み方などを扱い、慣れさせておく必要があったと感じる。それにより、読み方に対する「共通のものさし」を児童が持ち、積極的に活用して読んでいこうとする意欲が生まれるはずである。これからは授業の見通しをしっかりと持った上で、全体でおさえるべき所は時間をかけておさえ、読み進めるために必要な土台作りを行っていきたい。

ひびきあいに関しての成果としては、まず第１に全体での交流の前に、自分の意見を相手に話す機会を作ることができたことがある。その中から、友達の意見に興味を持ってメモしたり、友達の意見を自分の考えに付け足したりする姿も見られ

た。友達の考えを知りたいと思うところはあるのだが、自分の考えと比較しながら聞くというところまでは至らなかった。ただ、考えが知りたいというところから、比較して相違点や類似点に着目して相手の話を聞けると、ひびきあう姿に近づけるのではないかと考える。普段から意識して声を掛けていきたい。自分の考えに対する理由付けも、文章中に根拠を見つけて考えるところまでは良かったのだが、全体交流の場で積極的に伝え合うことが不十分になってしまったのは残念だった。その理由としては、読み取る時間の不足や、小集団での伝え合う機会が少なかったからではないかと考える。より自分の意見に自信が持てるように段階を踏んだ指導や、授業中の雰囲気作りを心がけていきたい。

☆本時について（　当日版　）

（1）目標
〇ごんの心情がより大きく動いた点を叙述に即して話し合うことを通して、ごんの心情を読み取ることができる（読）

（2）展開（9／13）

学習活動	指導上の留意点
1、前時までの学習内容を想起する 2、学習課題について確認する ごんの気持ちが１番大きく変わったのはどこだろう 3、課題に対する自分の考えを確認し、考えを交流する。 予想される子ども達の意見 **①「ははん、死んだのは兵十のおっかあだ」** 「あ、兵十だ。いたずらしちゃえ。」→「赤いさつまいもみたいな元気な顔がしおれているから心配。自分のせいで兵十のおっかあは死んだんだ」 **②「ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった」** 「おもしろそうだからいつもみたいにいたずらしちゃえ。ちょっとからかってやろう」→「なんてことをしたんだろう。きっとわしのせいだ」 **③「おれと同じひとりぼっちの兵十か」** 「おっかあはうなぎを食べたかっただろうに、わしがいたずらをしたばっかりに」→「おっかあが死んで兵十はひとり。わしと一緒。ひとりぼっちの気持ちはよくわかる」 **④ごんは、これはしまったと思いました** 「いわしをあげたから、さぞかしこの償いを喜んでくれただろうな。いいことした」→「いいと思ってしたのに、兵十を結果的に傷つけてしまったなんて、兵十すまない。」 **⑤「へえ、こいつはつまらないなあ」とごんは思いました** 「もしかして、物を置いてるのはわしじゃないかと気づいてくれるかもしれない。気持ちはきっと伝わっているはず」→「なんだよ兵十。わしだよ、ごんだよ。わしがやってるんだよ。もっとわしを見てくれよ」 **⑥「ごん、おまいだったのか、いつもくりをくれたのは」** **⑦「ぐったりと目をつぶったままうなずきました」** 「つぐないをわしがやってるなんて思わなかったし、兵十はわしのことに気づいてくれてなかった。」→「兵十、そうだよ。わしだよ。やっとわかってくれたんだね。」 4、学習の振り返りをする	・できるだけ客観的にならないよう、ごんの心情に寄り添うように読むようにさせる。 ・自分の意見の見直し、ペア交流、全体交流という流れで話し合いを始める。 ①②とつながる部分がある。兵十に対する思いもなく、いたずらをしていたごんだが、おっかあの死を目の当たりにして責任を感じる。この後つぐないへと向かうので、③の気持ちと似ている。　**→反省** ②いたずらをしたことへの後悔。償いが始まるきっかけになっているが、ごんは自分の責任だと自分で思っているだけ。③でも反省の気持ちが生まれることに気づかせたい　**→反省** ③反省の気持ちから兵十が気になりだしているごんは、自分も兵十も「ひとりぼっち」という共通点から、兵十に対する思いを強くする。①から兵十が気になりだしているごんの気持ちをおさえさせたい **→親しみ** ④償いがあだになったことに気づき、また自分の行動を振り返る。しかし、次の日もまた償いに行くことから気持ちの変化はない。償い自体は続いていることに気づかせたい　**→反省・後悔** ⑤償いが自分だとわかってくれてるのでは？という期待から後を付いていくごんの気持ちの高まりと、次の日もやはり償い続けることに気づかせたい **→わかってもらえない** ⑥⑦とほぼ同じ箇所だが、ごんの発言ではなく兵十の発言であることが⑦と異なる。ごんの心情の変化を探しているので、より⑦の方が合うことに目を向けさせたい。　**→わかってもらえてうれしい** ⑦今まで高まってきたごんの兵十への気持ちは一方通行で、重なりは見られなかったが、ここでやっと通じ合う。この文以前（特に④）から想像できる気持ちと比較すると変化がとらえやすいことに気づかせたい **→わかってもらえてうれしい** ＊叙述から想像を膨らませて読み、読み取ったことを進んで話し合おうとする。　（関心） ＊場面の移り変わりや情景、登場人物の心情を叙述をもとに想像しながら読んでいる。 （読むこと） ・友だちの意見にも耳を傾け、新しく気づいたことや感じたことについても交流させる。

	・挙手が少ない時は、ペアで交流する時間を設ける。 ・「教科書△ページの〇行目の文から、ごんは□□□と思っていたのではないかと思います。理由は～だからです」のように、ごんの気持ちになって発言ができるように指導する。